

パーソナルジムの恰好いい
お兄さんに騙されて

セクハラ ストレッチ

からの
生ハメおまんこトレーニング
までされちゃった話



仲のいい友達に彼氏ができた。

おめでたいことだつて素直に喜びたけれど、正直言つて複雑だ。元々好きなアニメ繫がりで仲良くなつたし、彼氏いな歴年齢同士だねつて笑い合つてたのに。

「はあ～～、裏切り者……」

メッセージで送られてきた彼氏との写真を見てため息が漏れる。

めちゃくちや格好いいじやん：いや、見せてつて言つたのは私なんだけど…。イケメンだね、と返した。どうやらスポーツジムのトレーナーさんらしい。

「……私もせめて、この貧相な身体をなんとかしないとなあ……」

一緒に映つている友達の豊かな胸元を見てますますため息が漏れる。

そういえば今日、パーソナルジムの会員募集チラシが届いていたような……。グッズやブルーレイも買いたいけれど、写真を見ていると少しは自分磨きもしてみよう

かなあ……なんて気持ちになる。

（確かに、マッサージとかエステコースもあるって書いてあつたっけ……）

人の手でも借りたら少しはマシになるだろうか。

のろのろとベッドから立ち上がった私は、玄関に置きっぱなしだったチラシを手に取つて、サイトのQRコードを読み取つてみることにした。

——パーソナルジムの格好いいお兄さんに騙されてセクハラストレッチからの生ハメおまんこトレーニングまでされちゃった話——

「なるほどなるほど、それでご予約頂いたと……よし、わかりました！　今日からみつちりトレーニングで自信つけて、お友達さんにも負けないような彼氏作っちゃいましょう！」

メリハリのある大きな声。私とはまるで住む世界の違うような、格好よくて背の高い、がっしりしたイケメンだ。

そのイケメンが、黒い革のソファーアに小さく座り視線をうろつかせる私の前に、膝をついている。

「俺、担当インストラクターの小野寺 啓介（おのでら けいすけ）です。うちは名前で呼ばせてもらうのが基本でして、さくらさんと呼ばせて頂くんで！ 俺のことも気軽に啓介とか啓ちゃんとか呼んじやつてください！」

笑顔が眩しい……灰になりそう……。

せめて笑顔で返したいと思つたが、引きつった顔と小さな声でハイヨロシクオネガイシマス……と言うことしかできなかつた。

「ではトレーニングウェアに着替えて頂いて……普段運動あまりされないということなんで、まずは身体をほぐすストレッチからやっていきましょう。こちらで着替えたら声かけ

てください！」

「は、はい、わかりました……」

そう言つて小野寺さんは貸出のトレーニングウェアが置いてある場所と、更衣室を案内してくれた。

たくさん種類があるのでよくわからなくて、これかな……？ と思うものを手に取つて更衣室に入つた。

（……うへえ、これ、なんか露出多くないか……？）

おへそが見えるくらい短いブラトップと、シンプルなひざ丈の黒のスパッツ。ウインドブレーカーみたいな上着はあるけれど、それがなければほとんど身体の線が丸見えだ。

こんな貧相な身体ではとても似合わないと思うけれど……これしかないのだから仕がない。

下着を脱いで着替え、少し大きめのウインドブレーカーのチャックを完全に閉めると、おづおづと更衣室から出て声をかけた。

「あの、着替えました、けど……」

「おっ、了解です！ それじゃあ、あちらの部屋で身体を伸ばしていきましょう」

ヨガマットのようなものが引いてある部屋に誘導される。

パーソナルトレーニング用の個室だとは思うけれど、こんなに広いものなのだろうか。一番安いコースの体験をお願いしたはずなんだけれど……オープンしたてだから、サービスかな？ などと思っていたら、不意に背中と膝裏に手を入れられて、視界が反転した。

「つは……え……っ？？」

「ふははっ、すみませんビックリさせちゃいましたね。さくらさんには寝た体制になつていてただきたくて、俺が力をかけていくので」

「すご……全然何が起こってるかわからなかつたです……」

「最初は緊張しちやうと思うんですけど、一対一でやらせていただきくので、こうやつて触れることにも慣れていただきたくて。じゃあ、力かけていくので、ゆーつくり呼吸してくれさいね！」

「いだだだだ！！！！！ それ無理！ 折れ、折れるう！！！」

「あははははっ、めちゃくちゃ硬いですねさくらさん！ 折れないっすよ！」

十分後、そこには身体をねじられて叫ぶ私と、それを見て至極楽しそうに笑う小野寺さんの姿があった。

普段の運動不足が祟つてどこもかしこも硬い。ちょっと押されたりねじられただけなのに、すごく伸びてる感覚があつて汗までかいてしまった。

「あつ、あづいい……ストレッチ、まだやるんですかあ……？」

「全然まだこれからっすね！ 汗かいちゃいました？ 上着脱ぎます？」

「うええ……私の身体、貧相で恥ずかしいんですよ……」

「だいいじょうぶですよ、結局トレーニングの時は脱ぐことになりますし……それにさくらさん、スタイルいいじゃないですか」

お世辞がお上手で…と内心思いつつも、小野寺さんのあつけらかんとした感じにも慣れ
てきた。この調子じや遅かれ早かれ脱ぐことにもなるだろうし…と、あまり逡巡せずチャツ
クをおろし、ぱさりと上着を脱ぐ。

はあ、涼しい…。

「――――」

「つ……あ、あんまり見ないでほしいんですけど……」

「あつ……ああ、すみません！ いえ、本当に……スタイルいいなあ、と思つて」

なぜか驚いたようにこちらを見る視線に居たたまれずに体育座りすると、慌てた小野寺
さんがフォローに入る。そのまま緩やかに寝かされて、膝裏に手を当てられた。
ぐつと上に持ち上げられる。

(……ん？ ちょっと際どくないか、これ…？ いや、でも普通にこういう股関節のスト
レッチ、あるか…)

痛みはないけれど、片足だけと言えど足を開かされてる体制に徐々に恥ずかしくなってくる。

「あははっ、今スパツツだけしか履いてないじやん！」

「あつの、ちょっと…これは、恥ずかしいんですけど…ついだだだ！！！」

「あははっ、だーいじょうぶですって。股関節も柔らかくしないと、ケガするんで。ね？」

ニコ、と快活な笑顔を向けられて、大きな身体で覆い被さるようにして力をかけられる。恥ずかしい…の前に痛いってえ…！

「いだだつ、あのつ小野寺さ…が、頑張るんでえ、もうちょっと優しく…！」

「啓介です、俺」

「へあつ？」

「啓介って呼んでくれたら優しくしますよ」

何？ どういうこと……？

訳が分からぬ。分からぬけれど、とにかく優しくして貰えるならなんでもいい。

「け、啓介さん……つ……！」

「はは、優しく、ね？」

「お願ひします……つ、えつ！？」

やつと力を緩めて貰えた——と一息ついたのに、その瞬間両足を掴まれて開かせられる。がばりと開いた足の付け根の奥、形がぴったりと浮いて見えるそこに、啓介さんの腰が入り込む。

「ちよつ、と待つ……これ、恥ずかしいんで……つ！」

「え？ でも両足やらないと。皆やつてるんで、恥ずかしがることないですよ。痛くないですかね？」

ぐ、ぐつと少しづつ力をかけられる度、ずり、ずり……♡ と、布一枚だけのお股に啓

介さんの腰が当たる。力をかける度にそこが擦れて、恥ずかしさも相まって息が上がる。

皆、こんなことされて変な気分にならないの……？

恥ずかしさで頭がパニックになりながらも、耐えようと目をぎゅっと瞑る。

「はう……うう、つ……」

「……」

すると饒舌な啓介さんが急に無言になつた。

え、私、なんか変な態度とっちゃつたかな……？ そう思つて恐る恐る目を開くと、すぐ目の前に啓介さんの精悍な顔が迫つていた。

顔の両側に手を置かれていて、覆い被さられて……もう、こんなのほどんど、エッチしててる時の体制みたいじやん……！

「……痛くない？」

「へあ……つ！？ あっ、はい、痛くはない、です……つ」

「ん、それなら良かつた。もし痛かつたら言つてくださいね」

そういえば返事してなかつたかも……。恥ずかしさに震える声でそう答えると、啓介さんは笑顔に戻つた。すぐにまた動きが再開される。

ぐつ、ぐつ、と膝裏の手に力を込められて——痛くはない。ないけれど、ずりずりと……おまんこに啓介さんの腰が擦れて、どんどん変な気分になつていつてしまふ。

「んう……ううつ……、」

「さくらさん、息止めちゃダメですよ」

「うえ……つ」

「ゆつくり呼吸して、ほら、吸つてー、吐いてー……」

「すー……つ、はー……、つあ……ん、ん……つ」

力を抜けば抜くほど、ずり♡　ずり♡　と擦れる感覚が気になつて、声が漏れそうになつてしまふのに堪えることを許してもらえない。

バレないようにしなきやと思えば思うほど身体の熱が上がる。

「んう……つは、ふ……つあの……啓介さんつ、ほ、他のストレッチとか……あ、ありませんかっ……！？」

「他の？……そうですね、そろそろ違うところ伸ばしましようか」

ようやく解放された……。起き上がりながらはふはふと息を整える。

次はキヤットポーズという猫のようなポーズらしい。四つん這いになつたところで少し安心する。これなら顔を見られなくてすむ……。

そう思つたのに。

「お尻は上げたまま、背中はできるだけ床につけて——こうです」

「ひい……つ！？」

今度は背中から覆い被さつてくる。

啓介さんは容易に私を抱き込めるくらい身体が大きい。落ち着きかけた心臓がまた早鐘を打つ。

「もうちょっとお尻上げましょ。これ痛くないでしょ？」

「ひやつ、……つあ、はい、痛くは……んんつ……！」

覆い被されていいるせいでうまくお尻を上げられずにいると、大きな掌で下腹を抑えられて、ぐつと持ち上げられる。次はお尻と啓介さんの腰がぴつたりとくつついてしまった。お腹を押される度になぜかぞくぞくと熱が溜まる。

「まっすぐ手を伸ばして、そう、上手です」

「は、はい……つこれで……できてますか……つ？」

「いい感じですよ。胸をもうちょっと床につけられるよう、頑張ってみましょか」

「は、へ……つ！？」

するりと啓介さんの手がお腹を辿つてもつと上に這わされる。

——た、確かに私のは大きくないけど、もうそこは胸だつてえ……！

「あつ……待、啓介さ……そ、こは、ちょっと……！」

「そこ？　ここですか？」

恥ずかしさを堪えて言つたのに、全然やめて貰えない。
むしろ確認するように、すりすり……♡と脇腹から徐々に掌が上へと這い寄る。先つ
ぽの近くを撫ぜられてぞくぞくと腰が戦慄いた。

「――ここを、床につけて欲しいんです」

まるで動物のマウンティングみたいに、大きな身体に閉じ込められて――こんなの絶対、
おかしいのに。

そこは胸です、セクハラですって言わなくちゃいけないのに。

「……難しい？　じゃあ、ここだけでもいいですよ」

カリ……ツ♡

啓介さんの指が、わずかに反応している先端の突起を甘く引っ搔く。

「あ、ひ……っ！？♥」

「わかりますか？ ここなら、床につきやすいですよね？」

「け、すけさ……だ、めえ、そこ……っ♥」

「ダメじゃないでしょ？ さくらさんこそ、腰落としちゃダメですよ」

縮こまつて逃げようとするのに、もう片手でお腹をぐつと押されて戻される。こんなにびつたりくつついていたら腰がビクつくのもバレてしまふのに。

カリ……

カリカリカリ……

「あう、あつ♥ も、わかつたあ、やりますからっ♥」

「つけそうです？ 息吸つてー、吐いてー」

「すー……はー……っあ、あつ！？♥ なん、でえ……っ」

「まだ床についてませんから。ここですよ、ほら、意識して」

くにくに♡
カリカリカリ♡

必死に屈むのに床までは届かずにまた触られる。
カリカリされて勃起してしまった乳首はスポーブラ越しでも簡単に摘まめてしまふみたいで、摘まんだ乳首の先端を爪先で引っかかる。

(ダメ、これ、頭ばちばちして♡ 身体びくびくしちゃう♡ こんな……絶対バレてるし、絶対わざとなのにつ♡)

「ひ、ううつ♡ け、すけさ……つも、できな……んんつ、つけられ、ないい♡」「何度も深呼吸して力を抜いていけばつく場合もあるんで、もう少し頑張りましょうか。ほら、吸ってー……吐いてー……」

「む、ぎい……んあつ♡ ああ♡ やめ……も、手、どけてください……つ♡」「ちゃんとボーズ取れないとストレッチの意味ないですよ? ほら、またお尻下がつて。」

ダメですって」

乳首をすりすり♡ する手は止まらないまま、お腹を押さえられていた手がもつと下へとずれて、おまんこをむにい……♡ と抑えられる。スパツツに食い込んでいたそこが余計に圧迫されて、ぶちゅ……♡ と恥ずかしい音がした。

やばい、濡れてるの、バレた……！

「あう♡ やつ、やあ、も……へんなとこ、ばっかり……触るの、やめてください……！」
「…………変なとこって？」

気付けば、啓介さんの大きく響いていた声が低く、私にだけ聞かせるみたいな聲音になつていて。頭の後ろから響いてくるその声だけで、腰がぞくぞくと震えてくる。

「ちよつと触つただけでコリコリになつた、ここ？ それとも、ストレッチされてるだけで濡れちゃつた、ここ？」

カリカリカリ♥

くちゅくちゅくちゅ♥

言葉と共に乳首の先っぽを爪先で引っ搔かれて、濡れたおまんこの入口を遊ぶみたいに搔き回される。その度にへこへこ♥と腰が勝手に揺れてしまう。

「や、ああっ♥ こんな、あっ、んん♥ す、すそれちぢや、ないい♥」

「はは、今更？ 下着もつけずにこんな簡単に触られちゃって、媚び媚びの声出しながらスパツツぐちゃぐちゃに濡らして……誘つてるつて思われてもおかしくないですよ？」

「ひつ♥ んん♥ ちが、だつて……はじめてで、わからんなくて……つひや！？」

ろくにポーズも取れずに丸まっていた身体をひよいと抱き上げられて、胡坐をかいた啓介さんの膝に座らされる。

こんなひどいことをされているのに、興奮したように薄く笑う顔が見えて、きゅう、と降参するみたいに喉が鳴った。

「はじめてならちゃんと覚えて帰らないと。男の前で迂闊に身体晒したらどうなるか、しつ

かりトレーニングしましようね』

そんなの絶対おかしい。それなのに逃げることができない。がっしり掴まれてはいるけれど、本気で抵抗したらきっと逃げられる、そんな力加減。

それなのに。

火照る身体が、ちつとも動いてくれない。

私は促されるまま、啓介さんの太い首に腕を回してしまった。

ずりゅつ

ぬりゅ

ぬりゅ

ぬりゅ

あれから私は胡坐をかいた啓介さんにしがみついて、何度も恋人みたいなキスをされて……今は、スパツツ越しの濡れたおまんこに啓介さんの大きなおちんぽを挟んで擦り合わされている。

「はは、すっかり力抜けちゃって……足開くの上手になりましたね、まんこでちんぽ扱くトレーニングそんなに気に入った？」

「は、んむ♡ うう……♡ ふあ、な、に……？」

「なに、キスに夢中で聞こえなかつたんですか？ まんこでちんぽ扱くトレーニング、気に入つたかって」

「あう、わかん、な……つああ♡ こし、へこへこ、なつちやう……♡♡」

「かーわい……腰へコさせて、俺のちんぽ好き好きって言つてるみたい。はじめて、なのにね……？」

そんなんじやないって言いたいのに、ゆさゆさと揺さぶられる度に気持ち良くて情けない声が止まらない。

「裏筋でクリ擦る度に甘い声出ますねー……ここ好き?」

「ひやつ♥ ああ、あつ♥ け、すけさ……つそこ、ダメえ♥♥」

カリカリカリ♥

ぬりゅぬりゅ♥ こりゅこりゅこりゅつ♥

おちんぽでも指でもクリトリスを擦られて耐え切れずに身体が仰け反る。

すると屈んだ啓介さんにぴん♥ と勃起した乳首をぱくりと食べられてしまった。ちゅ、
ちゅ♥ と甘く吸われる。

「ひいっ！？♥ は、ひ……ついつしょに、するの、ダメえ、ああ、あ／＼つつ♥♥」

「ちよつと吸つただけでその反応……このよわよわ乳首もクリも、しつかり鍛えないとダメ
じやないですか」

ちゅう♥ れろれろ♥

こりゅこりゅこりゅこりゅつ♥♥

(あ、あ♡ ざい乳首とどこクリなのばれてる♡ きもちいいよお♡ こんなのすぐいく♡
おちんぽ扱きに使われながらイッちゃう♡)

「けい、すけさん♡ ああ♡ も、私……つ、イッちゃ……♡」

「なに、もうイきそう?」

にこ、と笑われて激しく揺さぶられ、媚びた腰が止まらなく——なるはずだつたのに。
がつしりと腰を押さえられて、こちらの動きを完全に封じられてしまった。

「ダメですよ、さくらさん」

「へあ……つ? や、なん、なんでえ……つ?♡」

「俺のちんぽ、もつとちゃんと味わっていってくれないと。これから奥までごちゅごちゅ突
かれていくトレーニングも、するんですから——ね?」

「やあ、あつ♡ むりつ、私……は、はじめてだからあ♡ むりです、そんな……♡」

囁かれながら抱き込まれてずりゅずりゅ♡ と無遠慮な腰振りをされる。

されるがままになりながらもふるふると首を振ると、また深いキスをされて。

「ん……しつかり慣らすからだーいじょうぶですって、絶対痛くしないんで。クリこちゅこちゅ扱いて乳首もぐずぐずに甘やかして……とろとろになつたまんこに、ゆくつくりゆくつくり挿れてくだけ……ね？」

「んくくくつ♡ やあ、あ♡ だめ、ぜつたい、だめ……♡」

「はは、腰びくびくさせてとろとろの顔してだめだめ♡ って？ ——期待しすぎでしょ」

そう言いながら啓介さんはスパツツをいとも簡単にびり……と破く。愛液でてらてらと光る恥ずかしいおまんこだけが露出してしまった。

「やつ、だめ……つあ、あつ！？♡ まつでえ、ゆび、とめ……くくつ♡♡」「

カリカリカリ♡

こりゅこりゅこりゅこりゅ

ぴんと勃ったクリトリスを指で直接甘やかすように撫で擦られる。

（ダメなのに♡ はじめてなのにこんなところでおちんぽ入れられちゃうの、絶対ダメなのに♡ 聞いて貰えなくて気持ちいいのいっぱいされて♡ イっちゃダメなのに指止めて貰えなくて♡♡ もう、頭ばかになっちゃう♡♡）

「あ、あっ♡ けい、すけさん、それ、すぐイっちゃ、ああ♡」
「ダメですって、ほら、まんこに力込めて？ 我慢、我慢……」
「ひ、うう♡ むり、触つぢや、あ、あっ♡」

すりすり♡ しこしこ♡

くりゅくりゅくりゅくりゅ

我慢って言うのに全然手を休めてくれない♡

言われた通りおまんこに力を込めても入口がひくひくと震えて愛液が溢れ、それにすら

感じてしまつて逆効果になる。

身体が勝手にクリトリスをすりゅすりゅ
と戻れないことを知った。

ダメ、これ、むり……

「ダメえ、あつ、びつ♥♥ やだ、イッちや、ああつごめ、なさ、~~~~~つ♥♥」

びくびくびく……っ！！
♥

い息が漏れる。
絶頂感を堪えきれずに甘い震えが体中を襲つた。快感にふーつ
ふーつと浅まし

イ つ ち や 、 つ た ． ． ．

「……あーあ、イッちゃつたんだ、さくらさん。ダメって言つたのに、ね？」

いく瞬間をずっと黙つて見つめていた啓介さんが低く囁く。それと共にぐちゅ……つ
♥

と音を立てて、啓介さんの指がイキたてのおまんこに入ってきてしまった。

「う、う♡ だつて、あつ♡ 啓介さんが……つも、ゆび、だめえ♡」

「俺のせい？ 違うでしょ、さくらさんのクリがちょっと触られただけですーぐいっちゃん 雑魚クリだからですよね？ ほら、ちゃんとごめんなさいして？」

「ひ、うう……つ♡ ごめ、あつ♡ い、イっちゃって、ごめんなさ……つ♡ ごめん、なさいいっ♡♡」

「そうそう、上手。はは……まんこくちゅくちゅされながらごめんなさいするの気持ちいいんだ？ すげー締まる……」

ぬりゅぬりゅ♡ すりすり♡

こちゅこちゅこちゅこちゅつ♡

愛液でとろとろの内壁を啓介さんの指が何度も行き来する。その度にきゅんきゅんとお腹が疼いて締め付けてしまう。

「さくらさんのまんこ、もうすっかりちんぽ受け入れる準備出来ちゃつてますね」

「んうう……っ♡ だつて、え……っあ♡ ああっ♡」

「だつて、何?」

「んう、け、すけさんの、ゆび♡ きもち、よくて……っ♡」

だから仕方ないんだと言いたくて回した腕でしがみつくと、深いキスが返ってきた。されるがままに口を開くとすぐに舌が侵入してきて上顎を擦られる。

それだけでも気持ちいいのに、内壁を探る指は甘く、とちゅとちゅ♡ と降りてきた子宮口を優しくノックする。

こんな所で、無理やりなはずなのに……まるで恋人同士みたいな触れ方に身体も心もとろけていく一方だ。

「は……、あんま可愛いこと言わないのでくれます? 痛くないようにしてるんで……まあ、こんな力抜けてたらもう痛くはなさそうか」

「んえつ、なに……、あつ、あつ……?」

ちゅぶ……♥ と音を立てて指が抜かれ、すっかりぬかるんだ入口にぴと♥ と啓介さんのおちんぽが宛てがわれる。腰をぐつと持ち上げられて入口とおちんぽの先っぽをすり♥ されて……♥

「あっ？♥ やあ、だめ、入れちゃ……つおちんぽ、入れちゃだめえ……♥」

「はは……さくらさん、ダメなら踏ん張らないと。ちゃんと抱きついて腰落とさないでいたら、ちんぽ入っていかないですよ」

そう言うと徐々に腰を抱く手の力を弱められる。言われた通り必死に抱きついて足も啓介さんの腰に絡めるけれど、快感に力の抜けきった身体が言うことを聞くわけがなくて。抵抗も空しく、ずぶぶぶ……つ♥ と、ゆっくりとおちんぽが入ってきてしまった。

(うう……つ啓介さんのおちんぽ、大きい……つ♥ くるしいよお♥ くるしい、のに……ぬるぬるのおまんこにずりゅずりゅ擦れてく、きもちよくて♥♥ 力、抜けちゃう……♥♥)

「あ♡ あう、う……啓介、さ……♡ ダメ、ダメえ……♡」

「はは……つ、さくらさん——俺、何もしてないですよ? さくらさんがゆくつくり腰落としてるから、勝手に入っちゃうだけ……ああ、どんどん力抜けちゃってるじゃん。もう、全部入っちゃいますよ……?」

ずぶ♡ ずぶぶ♡

とちゅ♡ ぱちゅう……つ♡♡

(あ……♡ おくまで、入っちゃ、つたあ……♡♡)

「あーあ、入っちゃった……キツキツで締め付けすごいな……さくらさん、痛くない?」「うう……つ♡ いたく、ないです……けど……啓介さん、の……おつきくて、くるひ……つ♡」

「……煽つてんの? それ」

少し怒ったような口調にびくりと肩を震わせるとまたキスが降ってきた。

ちゅ♥ ぢゅる……♥ と舌を吸われて唇同士を甘く擦られて。そうしているうちに、だんだんとおちんぽが馴染んで苦しさもなくなってくる。

(キス好きなのばれてる♥ 甘やかすみたいに唇すりすりされるの気持ち良いよお♥ お腹の中だんだん力抜けて……あ……? 今、やっとお尻……啓介さんの膝に、くっついて……♥♥)

とうとう啓介さんの大きなおちんぽを全部飲み込んでしまったのを自覚したと同時に、興奮した声で耳元へ——動くよ、と囁かれる。

とちゅつ♥ とちゅつ♥ とちゅつ♥
ぱちゅぱちゅぱちゅぱちゅ♥

「あ、ああっ♥ は、ひっ♥ ダメえ、激し、あああっ♥」「
かーわい……まだ全然激しくないですよ、さくらさん……つ

腰を掴まれたまま何度も上から突き上げられてわけがわからなくなる。激しくないと言
われても、『ごりゅごりゅ♥』とナカをこそぐ刺激が強すぎて耐えられない。

「うう、あっ、ダメ、なのにい……♥ あ！ やつ奥、おくとんとんするの、やめ、え……
くくく♥♥」

「奥突く度に入口きゅうきゅう締め付けてんのに？ ……ほんとにやめてほしかったら自
分で腰上げて抜いてもいいですよ、ほら、俺の肩に手回して」
「んっ、うう……つ♥ くくちから、はいらな……♥」

啓介さんの綺麗な筋肉のついた肩にぎゅうっと抱きつく。必死に足をついて腰を上げよ
うとするけれど、情けないほど遅いスピードでずりゅ、ずりゅ……♥ と擦れるだけで全
然先っぽまで抜けていかない。

「やあ……でき、できなない……♥」

「はは……ほーら、頑張って。お尻支えてあげますから」

むにゅりとお尻を掴まれる。それだけのことにして身体が震えてしまう。一生懸命腰を上げて、ようやく先っぽまで抜けた——と、思ったのに。

ずちゅつ！♥

ばちゅばちゅばちゅばちゅつ♥♥

「ひああっ！？♥ あっ、ああ♥ やだあ、なんで、あっ♥ うそ、うそづきい！♥」

「嘘ついてないですよ、腰動かさないなんて言つてないでしょ？ あんまり抜くの遅いから、ほんとはまだ入れてて欲しいのかなあーって……ほら、さくらさんのおまんこ嬉しい嬉しいって言つてるよ？」

とちゅとちゅとちゅとちゅつ♥

お尻を掴まれたまま腰を突き上げられて愛液がおまんこの端からとぶとぶと溢れていく。

（だめ♥ もう全部ばれちゃってる♥ おちんぽ入れられて気持ち良くなってるのばれちゃつてるよお♥ ギリギリまで引き抜いてからおちんぽで奥までこじ開けられるの、気持ち良

すきて、むり……（♥♥）

「ああつまた♥ またいくつ♥ け、すけさん、おくやめ、やめてえ、イッちやうからあつ

「もういくの？ ほんとよわよわ雑魚まんこでかわい……いいですよ、俺のちんぽしつかり味わいながらイってよ、さくらさん。ほら、イケ、イケ、イケ……っ♡」
「ああっ♡ あ♡ だめえ、いく、またいくうつあ、ああっ、～～～～つっ♡♡♡♡♡」

びくびくびくつ
♥
♥
♥

何度もお腹に力がこもって腰がビクつく。強すぎる快感に頭が真っ白になつて、はへ、はへ、と浅い呼吸を繰り返す。

(あ……やば、なんか……あたま、ふらふら、して……)

どうやら許容範囲を超えた快樂を受け止めきれなかつたらしい。私の意識は、そこで途切れてしまった。

side. 啓介

「…………寝てるだけ、か」

氣絶したさくらさんの身体をチェックして一息つく。すうすうと安らかな寝息が聞こえるので問題はないだろう。

——このまま行為を続けて起こしても良かつたが、あまり熱中すると個室の使用時間が過ぎてしまいそうだ。

まだ猛ったままのモノをゆっくりと引き抜く。くつたりと力の抜けきった身体をバスタオルで包み、カウンセリング室のソファに寝かせた。

無垢な顔で眠るさくらさんの頬を親指の腹でそっと撫でる。

「可哀想になあ……こんな悪い奴に捕まっちゃって」

仕掛けたのはちょっとした悪戯心からだった。恐らく貸し出しのウェアの、服の上下を取らずに上着と下着だけ取ってしまったのだろう。

明らかに露出が多いのに大して疑問に思っていない様子があまりに初心で、少し悪戯をしてみたら可愛い反応をするから止まらなくなつて、結局——初めてまで奪つて。

——それでも、まだ逃がしてやれる気がしない。

自らの歪んだ性分に細いため息をつきながら、さくらさんの着替えと荷物をまとめて自分のバッグに入れる。幸いにもさくらさんが最後の予約だったので、早く上がることにした。

何も知らず眠る細い体を抱き上げてジムを出る。

どうやつたらモノにできるだろうかと、それだけを考えながら。